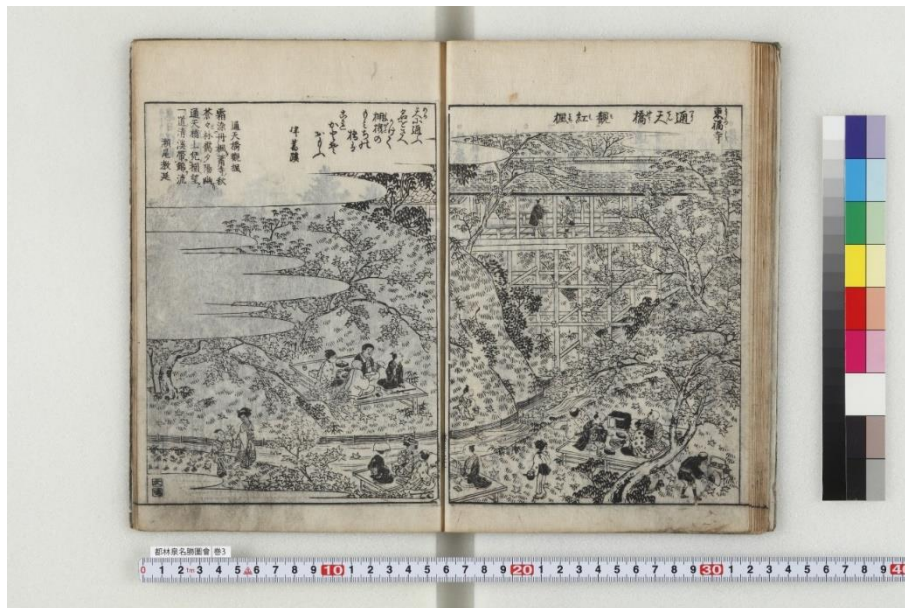


東福寺通天橋観楓の図



当館蔵「[都林泉名勝図会](#)」秋里離島作 寛政 11 年(1799)刊から

秋の紅葉をめぐることは万葉以来の文献に見られますが、紅葉狩が遊楽として庶民生活に定着するのは、京都の洛中洛外に名所・行楽地が形成された安土桃山、江戸期以降のことです。16 世紀末から 17 世紀にかけての京都は聚楽第の建設、御所の再造営、寺町の形成、御土居の築造、新道路の開通、高瀬川の開削、西陣の育成、伝統的社寺の整備・開創と、今日からみても信じられないような空前の投資と建築が続き、都大路は活気を取り戻し、応仁の乱の荒廃から急速に立ち直りました。平安と秩序の回復、経済と生活文化の向上、都市の整備が進むなかで、庶民が物見遊山を楽しむ時代が出現しました。

東福寺もこの時期に再建され、現在も紅葉の名所として京都の人々に親しまれています。

(「総合資料館だより」No.81(1989 年 10 月 1 日)より修正・
転載)

(2016 年 11 月 21 日公開)